

# 柏 原 陣 屋 跡

(奈良時代遺構の調査)

——兵庫県柏原総合庁舎内福利センター等  
建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書——

1993. 1

兵庫県教育委員会

# 柏原陣屋跡

(奈良時代遺構の調査)

——兵庫県柏原総合庁舎内福利センター等  
建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書——

1993. 1

兵庫県教育委員会

## 例 言

1. 本書は、平成3年度に実施した兵庫県氷上郡柏原町柏原688（字山田）に所在する柏原陣屋跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、兵庫県柏原総合庁舎内福利センター等建設工事に先立ち、兵庫県総務部職員課の依頼を受け兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。遺跡調査番号は、確認調査900110、全面調査900132である。
3. 本書および調査に使用した地図・空中写真は、国土地理院発行地形図1/50,000「篠山・福知山」・国土地理院発行空中写真（1/50,000）・柏原町発行柏原町全域図（1/2,500）を使用した。また柏原町歴史民俗資料館の御好意で栢原藩陣屋復元図（1/400）を使用させていただいた。
4. 調査に使用した水準点は、柏原町が設定したB.M.48（O.P.110.590m）を使用した。本書で使用した方位は磁北を示す。座標北はこれより東へ約6°40′振る（昭和54年現在）。
5. 発掘・整理調査において、佐藤信（聖心女子大学）、安田裕司（柏原町歴史民俗資料館）、國井和哉（氷上町教育委員会）、徳原多喜雄・山田義三（氷上郡教育委員会）の各氏から御指導・助言を得た。
6. 本書は、村上賢治が第1章を、村上泰樹が第2～4章を執筆した。編集は、池田正男の指導のもとに村上泰樹が行い、中筋貴美子がこれを助けた。
7. 本書の遺物番号は、本文・挿図・図版ともに統一している。
8. 調査で得られた遺物・図・写真等の資料は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2丁目1番地5）、および魚住収蔵庫（明石市魚住町清水字立合池ノ下630-1）に保管している。

# 目 次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の環境	
第1節 地理的環境	5
第2節 律令期の歴史的環境	5
第3章 調査の成果	
第1節 遺構の概要と層序	11
第2節 遺 構	11
第3節 遺 物	15
第4章 結 語	23

# 挿 図 目 次

第1図 柏原陣屋跡位置図	1	第12図 遺構配置図	10
第2図 確認調査トレンチ配置図	2	第13図 礎石1・2	11
第3図 確認調査Aトレンチ	3	第14図 溝1・2	12
第4図 調査風景	3	第15図 土坑1	13
第5図 水上盆地全景（南東から）	5	第16図 土坑2・3	14
第6図 調査区遠景（北西から）	5	第17図 土坑1礫出土状況（北東から）	14
第7図 律令期の遺跡	6	第18図 土坑3土層断面（東から）	14
第8図 石生集落遠景（南から）	7	第19図 出土遺物（1）	16
第9図 現在の春日七日市遺跡 （北から）	7	第20図 出土遺物（2）	18
第10図 史跡三ツ塚廃寺（西から）	8	第21図 出土遺物（3）	20
第11図 氷上・市辺遺跡遠景 （西から）	8	第22図 出土遺物（4）	21
		第23図 柏原陣屋内調査区 推定位置図	23

## 表 目 次

表 1. 律令期の遺跡一覧……………	7	表 3. 出土土器計測値・	
表 2. 土器組成表……………	22	出土位置一覧……………	25

## 図 版 目 次

図版 1	調査地周辺の空中写真	図版 5	出土須恵器(1)
図版 2	1) 調査区全景 (南から)	図版 6	出土須恵器(2)
	2) 土坑 1 (西から)	図版 7	1) 出土須恵器(3)
	3) 土坑 2 (北から)		2) 出土須恵器・土師器
	4) 礎石、溝 1・2 (南から)	図版 8	出土土師器・瓦
図版 3	1) 柱穴 1・2 と溝 1・2 (西から)		
	2~4) 礎石 1		
	5~7) 礎石 2		
図版 4	1) 溝 1 全景 (南から)		
	2) 土層断面 (南から)		
	3) 溝内土器出土状況 (北から)		
	4) 溝 2 全景 (北から)		
	5) 土層断面 (南から)		
	6) 溝内土器出土状況 (北から)		

# 第1章 調査に至る経緯

確認調査（平成2年10月15日～24日，調査面積162㎡，遺跡調査番号900110）

平成2年度に兵庫県総務部職員課により、兵庫県柏原総合庁舎（兵庫県水上郡柏原町柏原688）内に職員のための福利センターと浄化槽の建設が計画された。柏原総合庁舎の南に位置する崇広小学校は織田藩の藩邸である史跡柏原陣屋跡にあたり、絵図等からその範囲は庁舎側にも広がっていることが確認されている。

したがって庁舎内に建物を新築するという今回の計画に対して、総務部職員課から平成2年6月25日付け 職員第116号により「埋蔵文化財の有無の確認について」照会がなされた。こ



第1図 柏原陣屋跡位置図

の照会に対して兵庫県教育委員会では工事範囲が史跡柏原陣屋跡の敷地内に該当するため、遺跡の範囲及び既存の庁舎建設による損壊状況を把握するための確認調査が必要であると判断し、平成2年8月15日付け 教埋文第591号で「発掘調査が必要」との回答を行った。

以上の経過を経て県総務部職員課からは平成2年9月3日付け 職員第182号で調査依頼が提出された。県教育委員会では平成2年9月10日付け 教埋文第689号で「(確認)調査を実施する」と回答し、平成2年10月15日から24日にかけて確認調査を実施した。調査の対象面積は福利センター建設部分約320㎡・浄化槽部分約200㎡の計約520㎡である。発掘調査作業は入札による請負工事として実施し、井本建設株式会社が請け負った。

調査地点は、柏原総合庁舎内東側の部分に当たる。

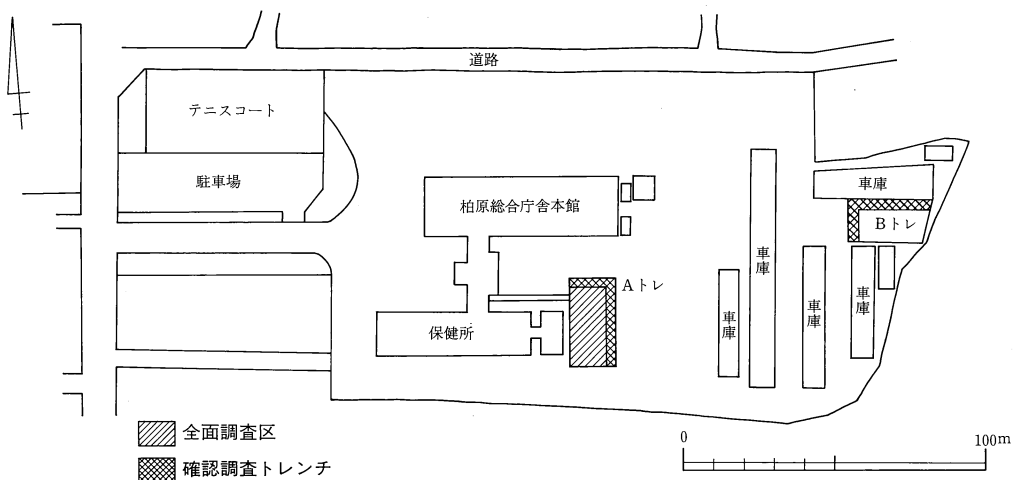
(調査の方法)

調査地は大きく2箇所に分けられ、保健所のすぐ東側の駐車場に利用されている地区をA地区、庁舎東側の車庫部分をB地区とした。

#### A地区

福利センター建設予定地内には上下水道管及び排水溝が埋設されているところから、予定地内の南側及び西側は掘削不可能である。そのため北側及び東側にL字形にトレンチを設定し、それぞれA-1・A-2トレンチとした。

調査地区は駐車場に利用されており、アスファルトに覆われていた。そこで先ずカッターによりそれを切断し、その後機械により切断したアスファルトの除去及び掘削を行い、30～60cm程掘削した。機械掘削と並行して人力による断面整形・人力掘削を行い、遺構面の検出及びその掘削を行った。



第2図 確認調査トレンチ配置図

## B地区

確認調査中でも車庫が使用できるようにトレンチを設定した。B地区もA地区と同様にアスファルトにより覆われていたため、カッターによる切断を行い、その後機械掘削・断面整形を実施した。

(調査の結果)

A-1トレンチでは明確な遺構を検出できなかったが、A-2トレンチでは2本の溝と礎石跡を検出した。地山面までの深さは現地表面から約20cm程度である。溝は深さ約1mでA-2トレンチの東側にそって検出され、現在の排水溝がその上を同方向に流れている。A-2トレンチの中央で溝は途切れ、この途切れた部分の西側に礎石が2箇所検出された。B地区では既存の浄化槽建設の際に攪乱を受けており、約50cm程度掘削したが、遺構・遺物は見られなかった。

以上の調査結果から、A地区については全面調査が必要であると判断し、B地区については工事の実施に支障がないと判断した。この取扱いについては、平成2年12月26日付け 教埋文第1178号で総務部職員課に回答した。



第3図 確認調査Aトレンチ



第4図 調査風景

全面調査（平成3年1月17日～2月7日、調査面積416㎡、遺跡調査番号900132）

確認調査の結果、A地区の全面調査が必要となったが、福利センターの建設事業が当該年度に計画されており、延期は困難であるため、すぐに全面調査を実施してほしいとの要望が職員課よりなされた。兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所では、①委託契約に日数がかかる、②アスファルトの処分の問題、③本体工事までの期間がない、④遺構密度が余り濃くない等の点を考慮して、総務部職員課と委託契約をせずに、本体工事側で掘削を行い、県教育委員会は埋蔵文化財の専門職員を派遣するといった方法で調査を実施することとなった。

職員課からは平成3年1月8日付け 職員第271号で全面調査の依頼が提出され、この依頼に基づいて調査を実施した。

全面調査の結果については、平成3年3月29日付けの教埋文第1439号で「記録保存をする」との取扱いをした。



## 整理調査

発掘調査の結果、須恵器・土師器・瓦・金属製品等の土器が出土した。出土した土器の量は、コンテナに換算して約4箱になる。

遺物と遺構記録資料の整理作業は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で、平成3年度から4年度にかけて実施した。

平成3年度は遺物整理の基本的作業である土器の水洗い・ネーミング・接合補強・写真整理作業を実施した。

平成4年度は前年度の実績を踏まえ、遺物実測・復元・写真撮影・遺構図補正等の報告書作成作業を実施した。これらの作業が終了した段階で、トレース・レイアウト作業を実施し、報告書を作成した。

また報告書作成作業と並行して、金属器の保存処理も実施した。

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

柏原陣屋跡は、現在の行政区画に従うと兵庫県氷上郡柏原町柏原 688 に所在する。字名は、山田である。氷上郡は、兵庫県の中央部、東寄りに位置し、柏原町・氷上町・山南町・市島町・青垣町からなり、北と東は京都府と境界を接している。西は朝来郡・多可郡・西脇市といった旧但馬国・播磨国に囲まれている。

氷上郡の北部は五台山・妙高山・安全山・讓葉山等の 500 m 級の丹波山地がそびえ、これらの山々の間に加古川と由良川の支流である竹田川が流れ、これら河川の流域には氷上盆地と呼ばれる河谷原が発達している。氷上盆地の氷上町石生字水分には、全国でも珍しい谷中分水界がある。

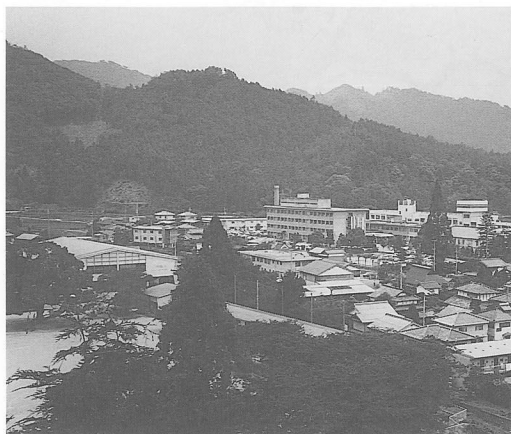
遺跡の所在する柏原町は、この氷上盆地の南端に位置する。柏原町の東部は、清水山・讓葉山・清水山等の標高 550 m 前後の山々とこれらの山塊の裾部に発達した扇状地からなる。西部は、加古川の支流である柏原川によって形成された段丘面が広がる。

遺跡は、柏原町の東部にある讓葉山の麓に位置する。詳細に述べれば讓葉山の西裾に展開する東奥集落のある谷部の開口部に立地する。



第5図 氷上盆地全景（南東から）

### 第2節 律令期の歴史的環境



第6図 調査区遠景（北西から）

柏原陣屋跡は正徳四年（1714）に造営された柏原藩の藩邸跡である。しかし今回発掘調査を実施した地区では柏原陣屋に関する遺構は認められず、新たに下層より奈良時代の遺構を確認した。報告は奈良時代の遺構が中心となるため、ここでは律令期の遺跡を中心に説明する。

律令制度のもとで定められた丹波国は、現在の行政区画では兵庫県に属する多紀・氷上両郡のほか、京都府に属する桑田・船井・天田・何鹿・加佐・与謝・丹波・竹野・熊野郡で構成さ



第7図 律令期の遺跡

- |              |              |              |              |
|--------------|--------------|--------------|--------------|
| 1. 柏原陣屋跡     | 2. 春日七日市遺跡   | 3. 山垣遺跡      | 4. 三ツ塚遺跡     |
| 5. 市辺遺跡      | 6. 氷上遺跡      | 7. 天神瓦窯跡     | 8. 鴨庄古窯跡     |
| 9. 野上野窯跡     | 10. 星角駅推定地   | 11. 式内社苜野神社  | 12. 式内社新井神社  |
| 13. 式内社奴々神社  | 14. 式内社伊尼神社  | 15. 式内社峠部神社  | 16. 式内社神野神社  |
| 17. 式内社加和良神社 | 18. 式内社芹田神社  | 19. 式内社楯縫神社  | 20. 式内社兵主神社  |
| 21. 式内社阿弥岡神社 | 22. 式内社知及神社  | 23. 式内社神田神社  | 24. 大山古窯跡群   |
| 25. 西木之部遺跡   | 26. 郡家長柄駅推定地 | 27. 野中長柄駅推定地 | 28. 味間長柄駅推定地 |

表1. 律令期の遺跡一覧

れていた。和銅六年(713)に丹波国各郡のうち加佐・与謝・丹波・竹野・熊野の五郡が分かれて丹後国となった。このような地方制度の改革と併せて道路網の整備も行われた。氷上・多紀両郡は山陰道が通り、「延喜式」によれば小野駅・長柄駅・星角駅・佐治駅の4駅が置かれていたことが知れる。これらの駅のうち小野駅と佐治駅は、多紀郡多紀町小野奥谷・小野新付近、氷上郡青垣町佐治にそれぞれ比定されている。残る長柄駅および星角駅は所在地に異説があり、明らかではない。多紀郡の長柄駅は篠山町郡家にあてる説(『大日本地名辞書』)、野中にあてる説(『丹波志』・村岡良弼<sup>①</sup>)、郡家付近に駅家をもち野中小枕付近にも支駅をもつ「複数形態」駅説(藤岡謙二郎<sup>②</sup>)、野中ないしは味間のいずれかにあてる説(足利健亮<sup>③</sup>)、山南町阿草にあてる説(岡本丈夫<sup>④</sup>)などの諸説がある。ところが、昭和63年に発掘調査された篠山町西浜谷所在の下小西ノ坪遺跡から「永柄」と書かれた墨書土器が出土したことにより、当遺跡周辺に長柄駅を想定することが有力視されるようになった。また当遺跡の東側には、多紀郡衙推定地とされる郡家所在の東浜谷遺跡・古屋敷ノ坪遺跡が接近している。続く星角駅は、古くは多紀郡丹南町味間にあてる説(奥田楽々斎<sup>⑤</sup>)、氷上郡氷上町石生にあてる説(直木孝次郎・村岡良弼<sup>⑥</sup>)、氷上町新郷・由利付近に求める説(岡本丈夫<sup>④</sup>)がある。星角駅は考古学的裏付けはないが氷上町石生にあてる説が現在のところ有力視されている。山陰道は京都から天引峠をとり多紀郡へ入り、小野駅・長柄駅・佐治駅を通り但馬国へ至る街道である。星角駅が石生付近にあるとすれば、多紀郡から氷上郡への山陰道は、郡境の鐘ヶ坂を通り、柏原陣屋の西側近くを経て石生に至り、さらに加古川流域を北上し青垣町佐治へ至る道



第8図 石生集落遠景(南から)



第9図 現在の春日七日市遺跡(北から)

筋と考えられる。

氷上郡は、近畿自動車道建設工事、ほ場整備事業等の開発が進み事前に実施された発掘調査によって多くの考古学的成果が得られている。地方官衙関係では「郷家」の可能性が高い春日町春日七日市遺跡(2)、「里家」の可能性が指摘されている山垣遺跡(3)等をはじめ、「郡衙」の可能性も指摘されている市島町三ツ塚遺跡(4)がある。また、星角駅と推定される氷上町石生は、昭和56年に石生集落の南側に展開する水田部分の確認調査が実施されたが、遺構は確認されていない。この石生集落から北へ直線距離で2 kmのところには市辺遺跡(5)、3 kmのところには氷上遺跡(6)がある。両遺跡とも山陰道沿いに立地する遺跡である。これらの遺跡は、ほ場整備事業に伴う確認調査によって発見された遺跡で、調査者によれば奈良時代から平安時代の掘立柱建物が確認されている。とくに市辺遺跡では13×16mの大型の建物が確認されており、官衙的な要素

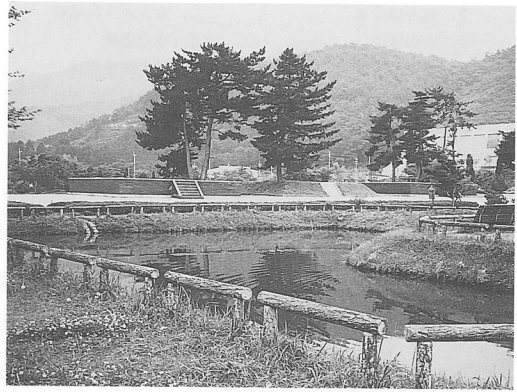
をもつ遺跡である。このあたりは氷上郡衙に推定されており、両遺跡の調査が待たれる。

寺院址は、白鳳期創建とされる市島町三ツ塚廃寺(4)がある。昭和47年以降数次に渡って発掘調査が行われ、金堂と東西に配された塔が一直線に並ぶ「新治廃寺式」と呼ばれる伽藍配置であることが判明した。この伽藍配置は、茨城県真壁郡協和町新治廃寺、兵庫県龍野市奥村廃寺と三ツ塚廃寺の3例が確認されているのみで、全国的に見ても珍しい伽藍配置である。

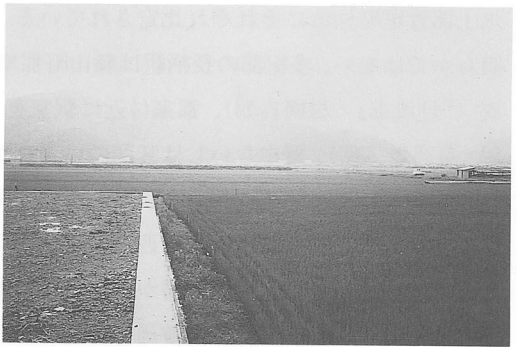
窯跡は、先に述べた三ツ塚廃寺に瓦を供給した天神瓦窯跡(7)があり、この窯の東側に位置する谷部には鴨庄古窯跡(8)があり、7～9世紀の窯跡が30基以上確認されている。また、春日町では春日七日市遺跡東側の谷部で奈良時代前半の野上野窯跡(8)が発見されている。

氷上郡内には条里地割が数多く残っていたが、近年のほ場整備事業によって多くが消失し、今その遺構を確認できる所は少ない。春日七日市遺跡・山垣遺跡の周辺は、調査時には条里地割が残っており、両遺跡ともこの条里地割の制約を受け成立していたことが明らかになっている。また柏原陣屋跡のある柏原町内の柏原川流域にはN2° Eの方向を示す条里地割が確認されている。

以上、当遺跡周辺の律令期の遺跡を概観した。氷上郡内には式内社を含めると律令期の遺跡



第10図 史跡三ツ塚廃寺（西から）



第11図 氷上・市辺遺跡遠景（西から）

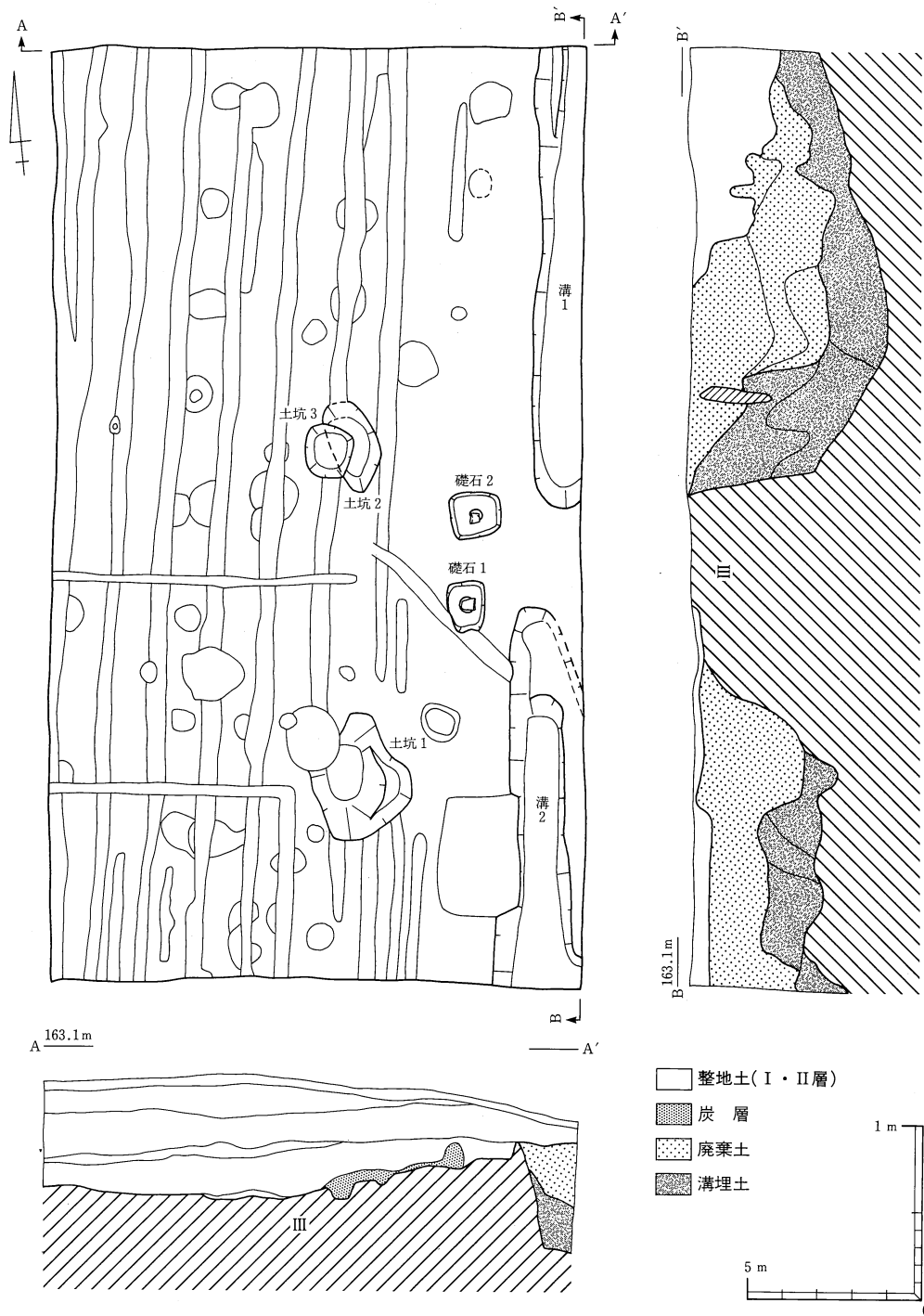
が多く存在していることが判る。このような歴史的環境のなかに、柏原陣屋跡下層の奈良時代の遺構は立地している。

#### 註

- ① 村岡良弼 『日本地理志料』
- ② 藤岡謙次郎 『都市と交通路の歴史地理学的研究』大明堂 1960
- ③ 足利健亮 「歴史地理学からみた巡礼路」『西国33所巡礼道』歴史の道調査報告書 第一集 兵庫県教育委員会 1991
- ④ 岡本丈夫 「古道が語る一丹波・延喜の道の一考察」『兵庫の歴史24』兵庫県 1988
- ⑤ 奥田楽々齋 『多紀郷土史考』 1958
- ⑥ 直木孝次郎 「律令制と民衆」『兵庫県史 第1巻』 兵庫県 1984
- ⑦ 安田裕司氏の御教示による
- ⑧ 國井和哉氏の御教示による

#### 参考文献

- 安田裕司 「柏原陣屋跡」『兵庫県の歴史27』兵庫県 1991
- 直木孝次郎・武藤誠・藺田香融 「律令制の社会」『兵庫県史 第1巻』 1984
- 井守徳男・平田博幸 『春日七日市遺跡（I）—第3分冊—（飛鳥・奈良・平安時代遺跡の調査）』  
兵庫県教育委員会 1991
- 加古千恵子・平田博幸 『山垣遺跡一里長関連遺構の調査—発掘報告書』兵庫県教育委員会 1990
- 高井悌三郎他 『丹波三ツ塚遺 I～III』市島町 1973・1975・1981
- 吉田 昇 『鴨庄古窯跡群（I）—南1号窯跡—』兵庫県教育委員会 1988
- 藤岡謙二郎編 『日本歴史地理総説 古代編』吉川弘文館 1975



第12図 遺構配置図

### 第3章 調査の成果

#### 第1節 遺構の概要と層序

今回の調査では、柏原陣屋に関する遺構は確認されず、確認調査の成果のとおり、奈良時代の礎石・溝・土坑が確認された。これらの遺構は、明治以降の建築基礎工事および畑耕作によって破壊を受け、遺構の遺存状況は、必ずしも良好とは言えない。

当調査区の層序は以下のとおりである。

I層. 駐車場舗装工事盛土

II層. 橙色砂層および暗褐色砂混じりシルト（明治以降の盛土）

III層. 暗褐色礫混じりシルト（遺構確認面）

II層は、焼土塊・炭片を多量に含み、奈良時代・江戸時代・明治時代以降の遺物を含む。続くIII層上面で奈良時代の遺構および明治以降の溝・礎石を確認した。

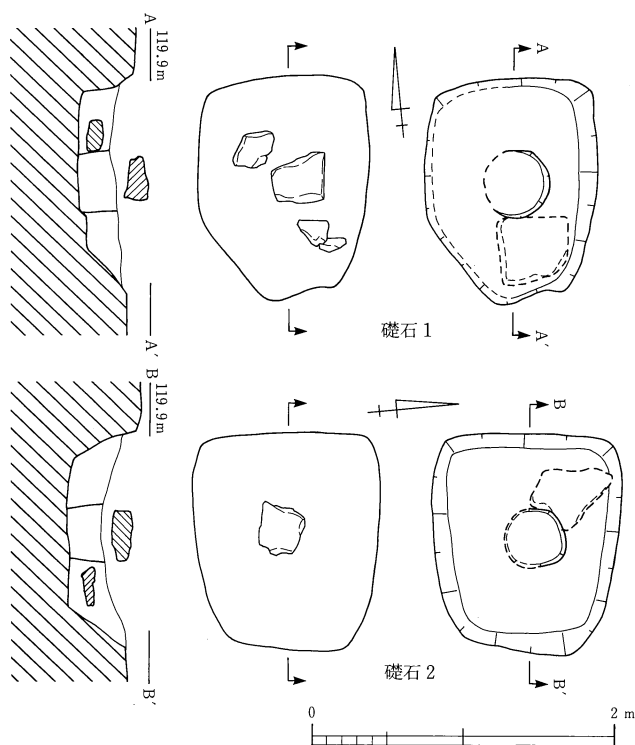
以下、奈良時代の遺構について説明する。

#### 第2節 遺構

奈良時代の遺構は、礎石2基、溝2条、土坑3基がそれぞれ確認された。

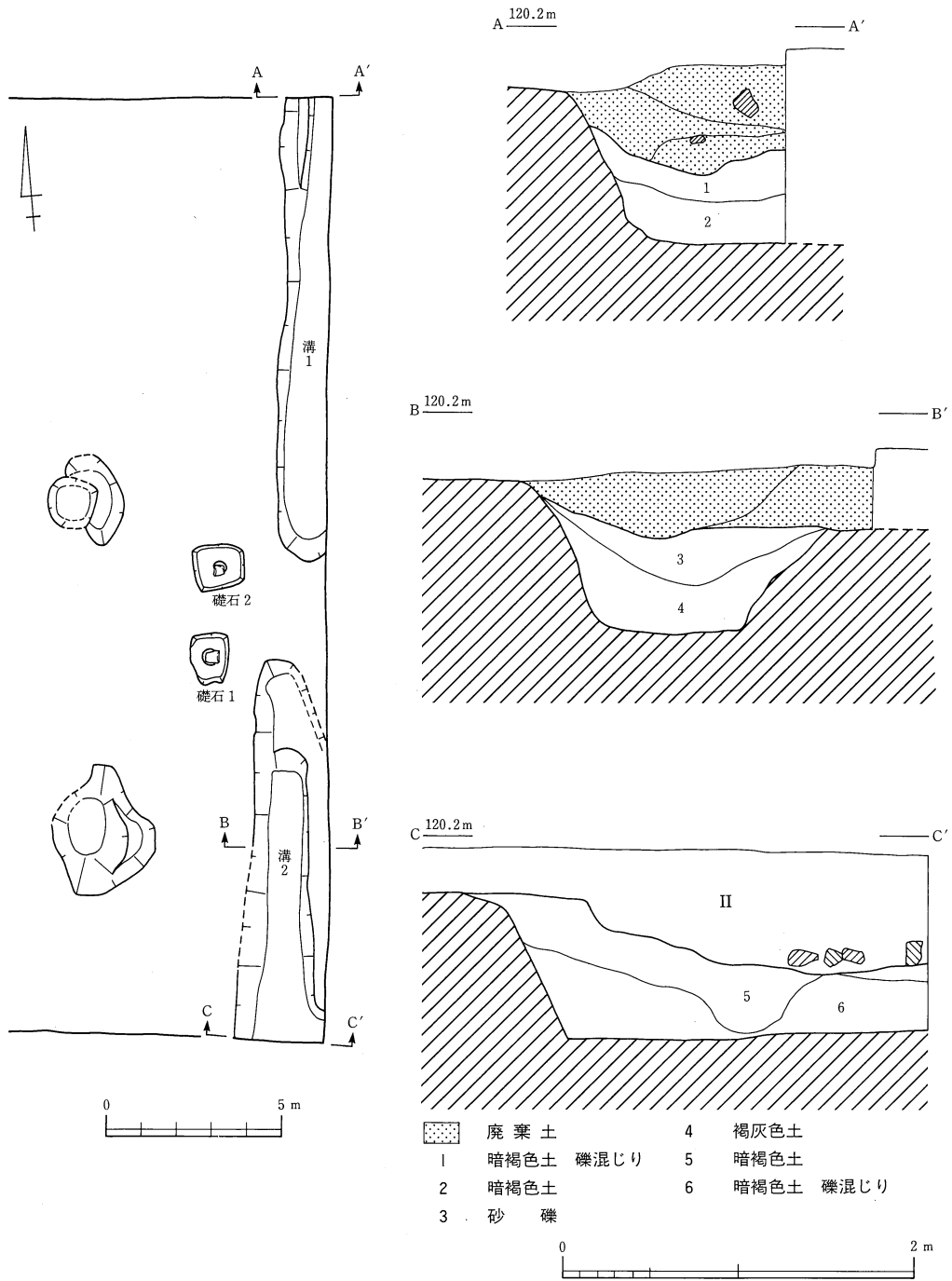
##### 礎石1・2

調査区中央部、やや東寄り、2基の礎石が南北方向に並ぶ形で確認された。両礎石間の距離は礎石の中心で2.5mを測る。礎石はいずれも扁平な河原石を用いている。礎石1は34×30cm・厚さ14cm、礎石2は30×30cm・厚さ14cmの大きさである。両礎石の掘方はいずれも隅丸方形を呈し、礎石1は1.5×1.14mの規模で長軸を南北方向にもつ。礎石2は1.44×1.2mの規模で長軸を東西方向にもつ。礎石1・2の掘方を断ち割ったとこ



第13図 礎石1・2





第14図 溝1・2

ろ、土層断面で径40cm前後の柱痕をそれぞれ確認した。この掘方底面の柱痕脇には、30cm前後の扁平な河原石が確認された。2つの柱穴間の距離は、中心で2.6mを測る。確認面からの掘方の深さは、礎石1が37cm、礎石2が48cmである。

遺物は出土していない。

### 溝1・2

溝1・2は調査区の東端を南北方向に走る溝である。溝1・2は3mの距離をおいて対峙した形で確認された。溝1・2の間には礎石1・2が近接する。各溝の東側立ち上がり部分は調査区外に延び、溝の正確な規模・形状は不明である。溝1の確認面からの深さは平均90cmを測る。溝2は最深部で1.1mを測り、北側に向かって浅くなっている。溝1・2ともに西側の立ち上がりは急である。

両溝内の埋土堆積状況は似通っており、上層の舗装盛土層を除くと2層に大別できる。上層は、多量の焼土・炭片を含んでおり、この堆積土は火災で生じた廃土を投棄した土と理解している。この層からは多量の須恵器・土師器が出土し、その数は土器量の77%を占める。下層は溝内に自然に堆積した土である。

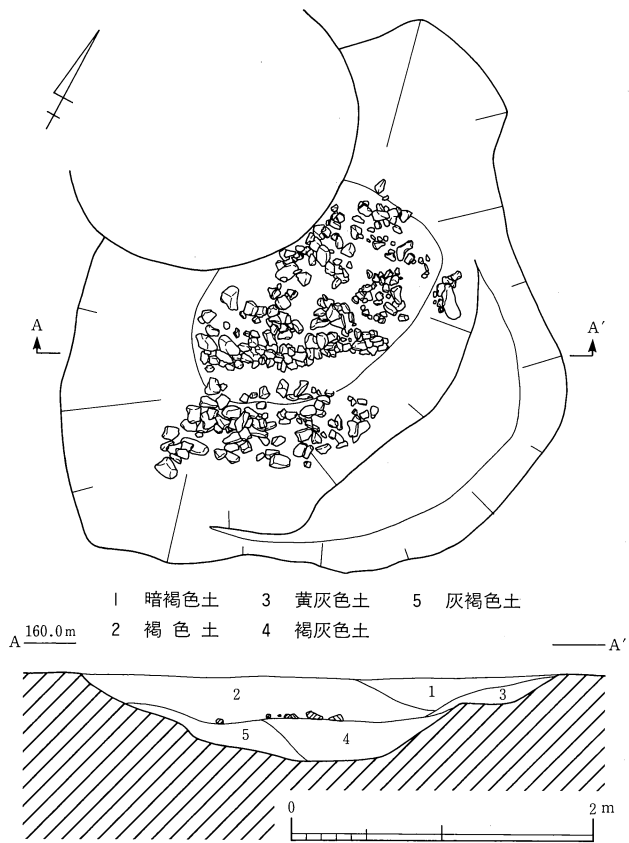
### 土坑1

調査区南半部のほぼ中央に位置する。土坑の北西隅は、近代以降の井戸に破壊されている。土坑の規模・形態は、南北方向が4.1m、東西方向が3mの不整楕円形を呈する。確認面からの深さは、最深部で54cmを測り、断面形は浅い楕円状を呈する。

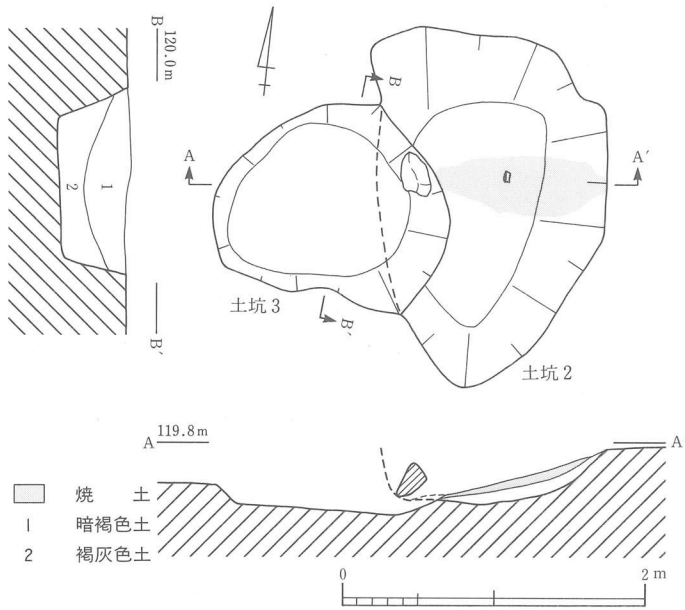
土坑の埋土は5層に分かれ、いずれも炭片を多量に含んでいる。4・5層上面には多量の礫が確認された。遺物は、須恵器がこの礫に混入した状態で出土するものが多い。

### 土坑2・3

調査区の中央部に位置する。土坑2・3は重複し、土坑2が新しい。両土坑は、明治以降の溝によ



第15図 土坑1



第16図 土坑2・3

土坑2は南北方向に長い不整楕円形を呈し、規模は南北方向2.35m、東西方向が推定で1.4m前後を測る。確認面からの深さは、最深部で34cmを測り、断面形は皿状を呈する。土坑の東側立ち上がり部分から底面にかけて焼土層が部分的に確認された。土坑の西側立ち上がり付近で底面より30×25cm前後の赤化した河原石が出土している。

遺物は焼土層中より須恵器壺が1点出土している。

土坑3は東西方向に長い楕円形を呈し、規模は東西方向が1.55m、南北方向が1.2mを測る。確認面からの深さは35cmで、断面形は深い皿状を呈する。埋土は2層に分かれ、いずれも炭片を多量に含む。遺物は下層より須恵器杯が出土している。



第17図 土坑1 礫出土状況 (北東から)



第18図 土坑3 土層断面 (東から)

## 第3節 遺物

### 1. 出土状況

柏原陣屋跡からは、須恵器・土師器・瓦をはじめ、銅銭・煙管等の金属製品が出土している。出土した遺物の多くは、奈良時代の土師器・須恵器で、その量はコンテナに換算して4箱を数える。このうち器種が判別できるものは174点を数える。須恵器に比べ、土師器は細片が多く、器種の識別が可能な土器は少ない。

奈良時代に属する土器の90%は溝1・2から出土している。さらに詳しく出土状況を見てみると、前述したように溝内には、火災で生じた廃土を投棄した層（廃棄土と呼称）が厚く堆積している。この廃棄土から出土した奈良時代の土器は全体の77%を占める。溝以外に土坑1～3からも土器が出土しているが、土器の量は極めて少なく全体の5%に過ぎない。

柏原陣屋跡に関係する江戸時代の遺物は、軒平瓦・棧瓦・銅銭（寛永通寶）が各1点出土している。これ以外に江戸時代に属するかは問題があるが、煙管が1点出土している。江戸時代の遺物は、遺構からの出土はなく、すべて整地層中からの出土である。

### 2. 奈良時代の遺物

土器の基本的な器種分類は『平城宮発掘調査報告』に従った。以下土器を説明する。

#### 須恵器（1～38）

須恵器は、杯A・杯B蓋・杯B・杯C・杯蓋・皿A・皿B・皿D・壺・甕が出土している。このうち、杯A・甕は遺存状況が不良で、図化できる土器がなく、説明を省略する。

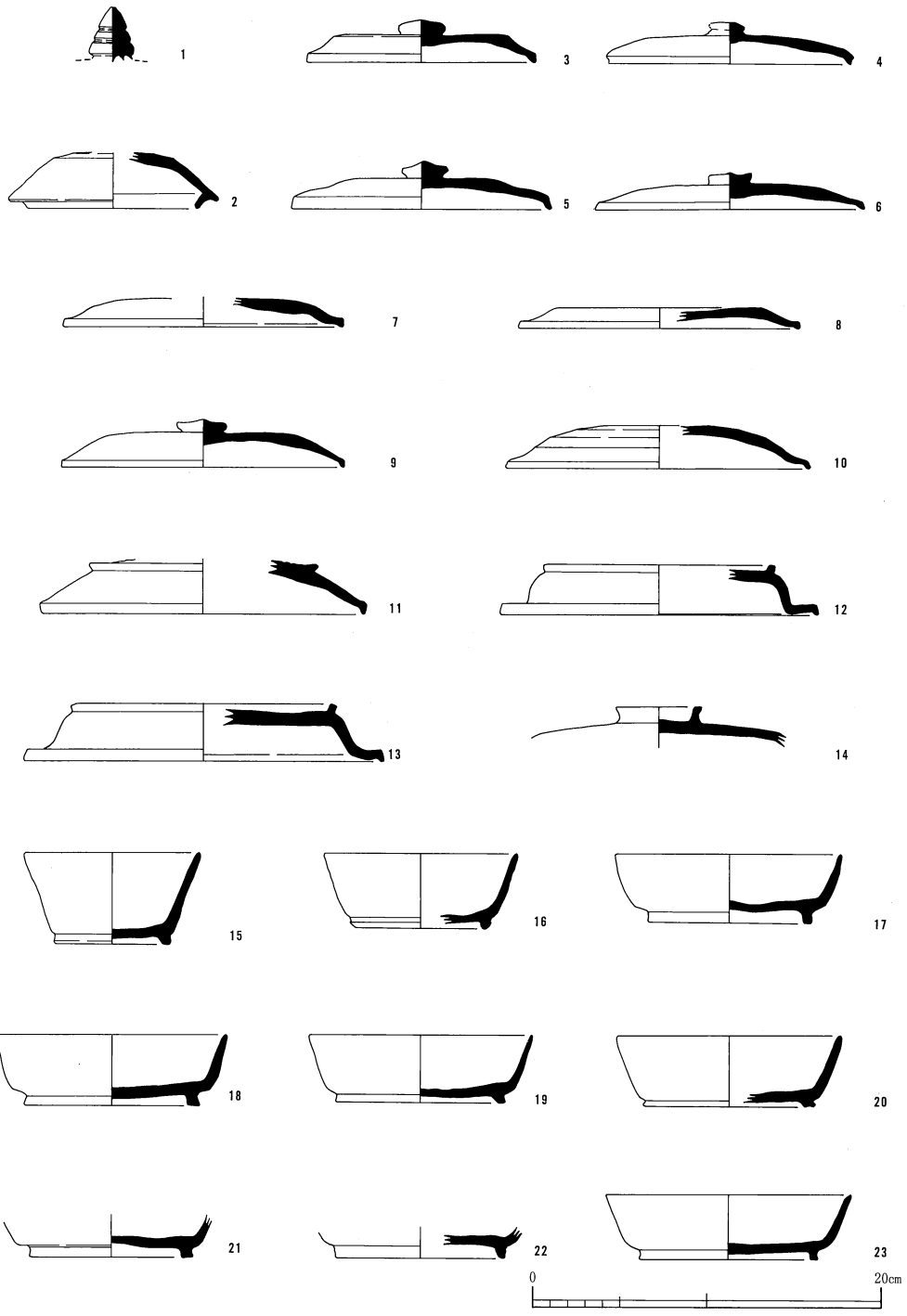
なお1・2・38は奈良時代以前の土器であるが、併せて説明する。

#### 杯B（15～27）

15は口径10.1cm、器高5.2cmを測り、杯Bのなかでは最小の口径を示す。口縁部直下に高台部が位置し、口縁部は直線的に外傾する。底部外面はへらキリの後ナデ調整を施し、底部内面は未調整である。

16～22は、平均値で口径12.6cm、器高4cmを測る杯である。16はこの一群のなかでも口径が11.5cmとやや小振りであるが、径高指数が38と高い値を示す。17～19は高台部と口縁部の移行部が屈曲するのに対し、21・22は移行部が丸味を帯び、高台部が口縁部直下に近くなり、高台部の高さも低くなる。底部外面は17がへらキリ後ナデ調整、底部内面は、17が未調整である以外、一方向ないしは二方向のナデ調整を施す。

23～25は平均値で口径14.8cm・器高5.3cmを示す一群である。このうち25は径高指数48を示し、この一群のなかでは突出して高い値を示す。高台部から口縁部への移行部は丸味を帯び、口縁部は外反気味に立ち上がる。底部外面は、へらキリ後ナデ調整を施す。底部内面は23・24



第19图 出土遺物 (1)

が一方向、25は不定方向のナデ調整を施す。

26は口径17.6cm・器高2.9cmを測る。高台部から屈曲して口縁部に移行し、口縁部は大きく外側に開く。底部外面はヘラキリ後ナデ調整、底部内面は不定方向のナデ調整を施す。

27は復元口径21.3cm、器高6.4cmを測り、杯Bのなかでは最大の杯である。口縁部への移行部は若干丸味を帯び、口縁部は外反する。

#### 杯B蓋（3～13）

3・4は平均値で口径13.5cm、器高2.4cmを測る一群である。扁平な頂部をもつ3と、笠形の頂部をもつ4がある。3のつまみ部は扁平で、その上面は中央が僅かに突出する。頂部は回転ヘラケズリのままで、仕上げ調整は施されていない。内面中央にも仕上げナデは認められない。4はつまみ部が小さく上面は丸く仕上げられている。頂部は回転ヘラケズリによって平坦気味に仕上げられている。内面中央は、不定方向のナデで仕上げている。

5～9は平均値で口径15.8cm・器高2.6cmを測る一群である。

5・7・8は扁平な頂部をもち、縁部が屈曲する蓋である。つまみ部上面は中央が僅かに突出する。頂部の調整は、回転ヘラケズリだけのもの（5）、回転ヘラケズリ後ナデで仕上げるもの（7・8）がある。内面中央は不定方向のナデで仕上げる。

6・9は扁平に近い頂部をもち、口縁部の屈曲の度合いが少ない蓋である。つまみ部上面は中央が突出し、周辺が窪んでいる。頂部は回転ヘラケズリ後ナデで仕上げる。内面は1方向のナデで仕上げる。

10～12は平均値で口径18.1cmを測る一群である。10は頂部が笠形に近く、縁部の屈曲の度合いも小さい。頂部から縁部にかけて回転ヘラケズリを施したままで、仕上げナデは施していない。内面は不定方向のナデを施す。

11・12は頂部と縁部の境に突帯を巡らす異形の蓋である。11は頂部と縁部の境に断面三角形の突帯を巡らせている。内面はナデで仕上げる。12は高台様の突帯を巡らす蓋である。内面中央は不定方向のナデを施す。

13は口径21.5cmを測り、杯B蓋のなかでは最大のものである。12と同様、頂部と縁部の境に高台様の突帯を巡らし、頂部にはつまみの痕跡を残す。頂部は回転ヘラケズリ後ナデを施す。内面中央は不定方向のナデで仕上げる。

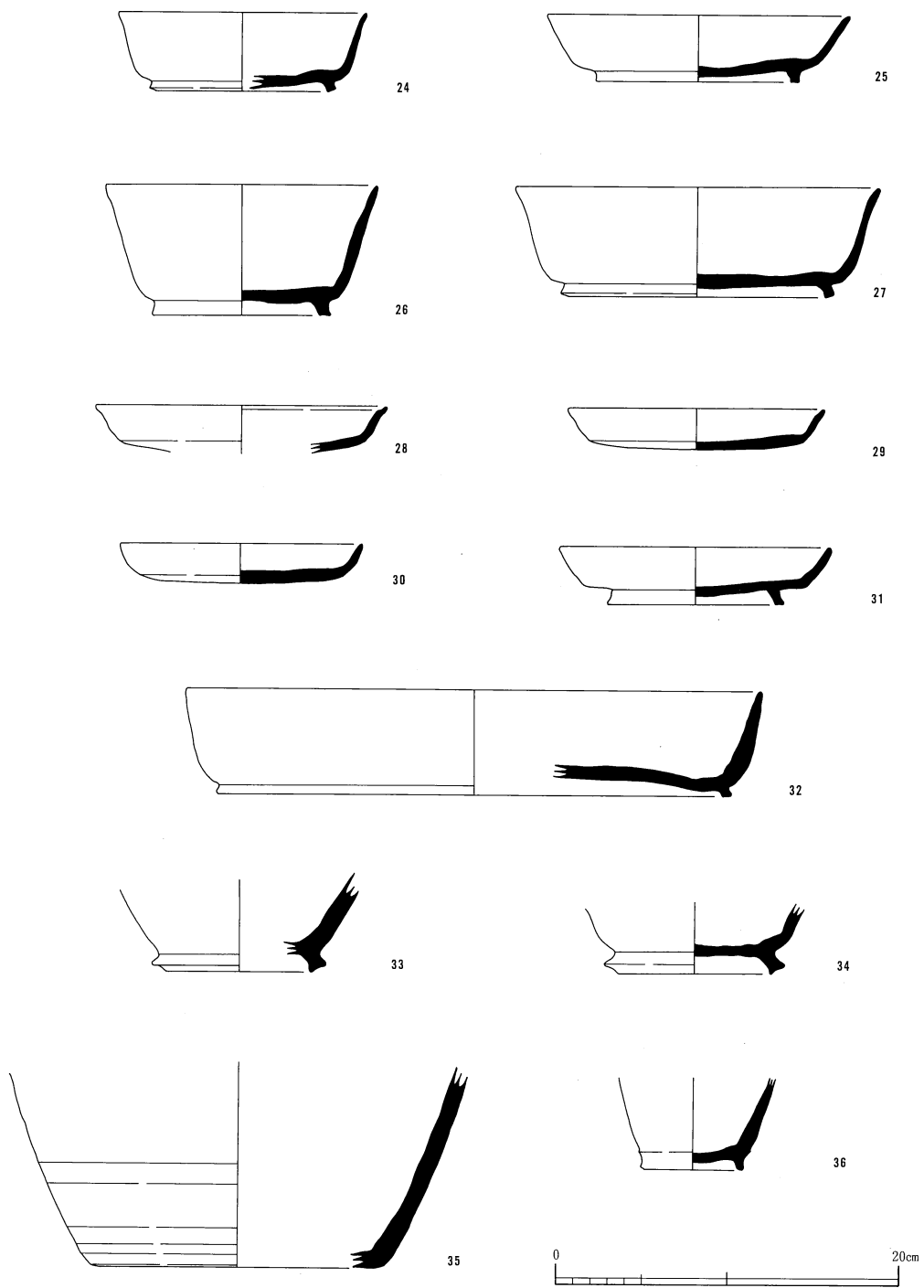
#### 杯C（28）

28は口径16.9cmを測り、口縁部が内側に若干丸く肥厚する杯である。底部外面はヘラキリ後ナデを施す。

#### 杯蓋（1・2・4）

1は宝珠状のつまみと考えられる。つまみ部には2条の沈線が巡る。

2は口径9.6cmと杯B蓋と比べて小型の杯である。扁平な頂部をもち、縁部内面のかえりが



第20図 出土遺物（2）

下方に張り出す。頂部はヘラケズリ調整、内面は不定方向のナデで仕上げている。

14は頂部に輪状のつまみをもつ蓋である。頂部は回転ヘラケズリのままで、内面は不定方向のナデで仕上げる。

#### 皿 A (29・30)

29・30は平均値で口径14.6cm・器高2.4cmを測り、扁平な底部をもつ皿である。30は底部から口縁部への移行部が丸味を帯びるのに対し、29は屈曲して立ち上がる。底部外面はヘラキリ後、ナデで仕上げている。29は内面に不定方向のナデを施す。

#### 皿 B (32)

32は復元口径33.4cm・器高6.2cmと皿のなかでは最大のものである。高台部は口縁部直下に位置し、口縁部への移行部は丸味を帯びる。底部外面はケズリの後ナデで仕上げている。

#### 皿 D (31)

31は復元口径15.8cm、器高3.4cmを測る。高台部は高く、底部中央寄りにつくられ、口縁部への移行部は屈曲して立ち上がる。底部外面はヘラキリ後ナデで仕上げている。底部内面は不定方向のナデで仕上げている。

#### 甕 (37・38)

37は口縁端部は上下に拡張し面をなす甕である。38は甕の口縁部と考えられる。口縁部下位と頸部にそれぞれ沈線が巡り、頸部の沈線上には円形浮文が張り付けられている。2条の沈線の間にはヘラ描斜線文が施される。

#### 土師器 (39～42)

##### 甕 (39～42)

口縁部が外反するもの(39)と「く」の字状に屈曲するもの(40～42)がある。調整は外面体部にハケメの痕跡が認められる以外、調整は不明である。

##### 瓦 (43～45)

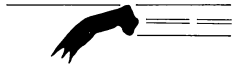
瓦は細片を含めて4点出土し、すべて平瓦である。出土位置は43・45が溝1より、44が溝2内より出土している。出土層位は、いずれも廃棄土中である。

43は桶巻き造りの平瓦である。凸面には一辺5mmの斜格子のタタキが施される。凹面には布目圧痕(縦糸8本/cm・横糸9本/cm)がある。調整は凸・凹面とも粗い縦方向のナデが施される。厚さは1.5～2cmを測る。須恵質で、粗砂を多量に含む。

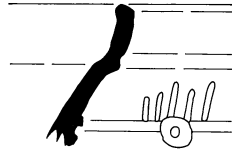
44は厚さ1.3cmと薄手の造りである。凹面に布目圧痕がある。調整は遺存状況が悪く詳細は不明である。凸面は凹凸が著しく、粗雑な調整と考えられる。軟質で粗砂を多量に含む。

45は、43と同様凸面に格子タタキを施す平瓦である。43に比べ格子の単位が大きく一辺1cmを測る。調整は、凸面が縦位のナデ、凹面は丁寧に横位のナデを施す。厚さは1.8cmを測る。須恵質で7mm大の礫を少量含む。

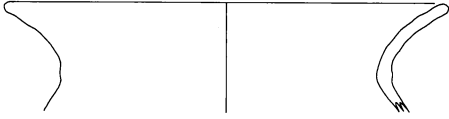




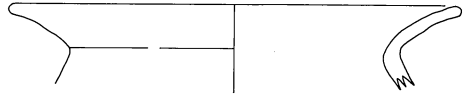
37



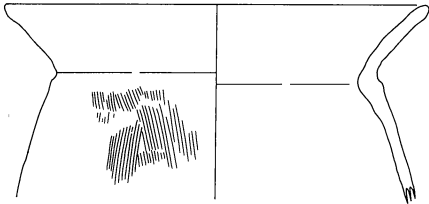
38



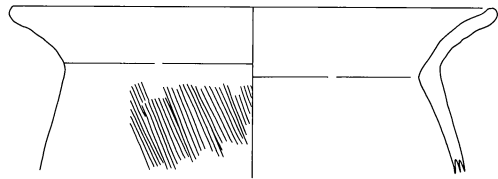
39



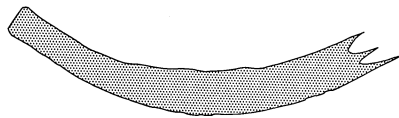
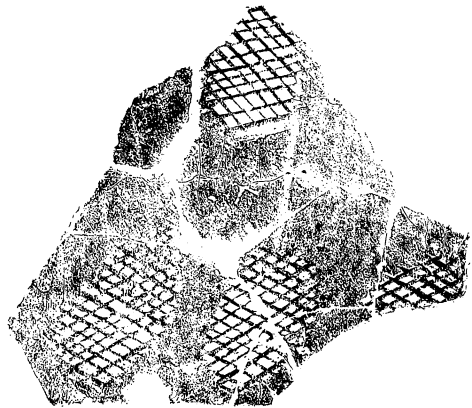
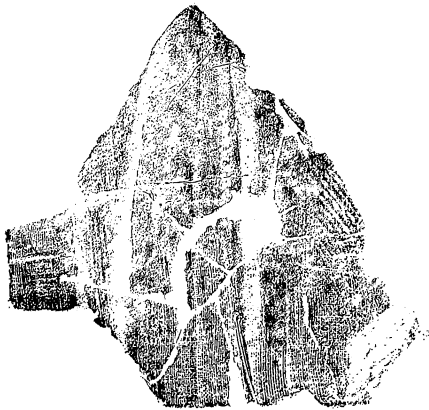
40



41



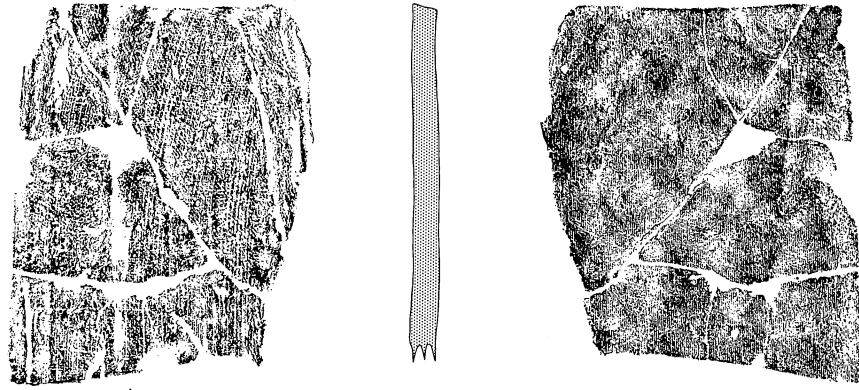
42



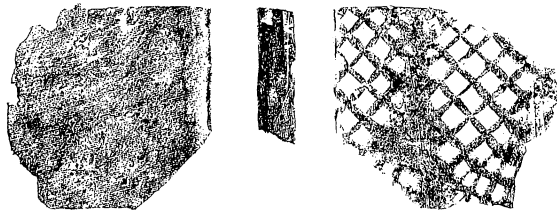
43



第21図 出土遺物 (3)



44



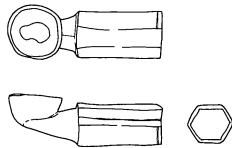
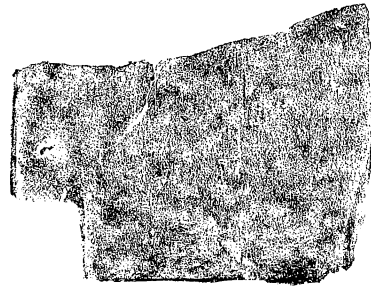
45



46



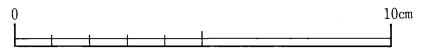
47



48



49



第22図 出土遺物(4)

### 3. 江戸時代の遺物

江戸時代の遺物は全て近現代の遺物と混在して出土している。整地層内から出土した遺物のなかから、柏原陣屋の時期に属すると考えられる遺物を抽出すると軒平瓦・平瓦・銅銭が該当する。これら以外に煙管があるが、柏原陣屋に帰属するかは不明である。

#### 瓦 (46・47)

軒平瓦 (46) と平瓦 (47) がある。46の軒平瓦は中心飾りの両脇に唐草文を配している。47は切り込みをもつ平瓦である。凸面側下端部側縁に2mm幅の面取りが施される。調整は下端部凸面側に横位のナデ、中央は縦位のナデが施される。凹面は丁寧に横位のナデを施す。

#### 金属器 (48・49)

48は「寛永通寶」である。背面にはかろうじて「文」の文字が確認できる。径2.5cm、穿径6mm、厚さ1mmを測る。

49は断面六角の雁首をもつ煙管である。雁首長4.1cm、火皿径1.31cmを測る。

### 4. 小 結

出土した土器のなかで、器種が識別できるものは174点を数える。報告した以外の器種としては、土師器杯A、須恵器杯Aがある。壺・甕については特徴的な部位が少なく、細分できなかった。表2はこれら174点の土器組成を示している。前述したように土器出土量の90%が溝1・2より出土している。今回の調査ではこれらの溝を完全に調査しておらず、この土器組成表の比率が遺跡全体の傾向を表す訳ではないが、この表の示すとおり土師器の占める割合が低い点は指摘されよう。

時期は、一部奈良時代以前の土器も混じるが、奈良時代前半の土器が多い。また量的には少ないが杯B蓋8・11~13、杯蓋14のように、後半代の土器も出土している。

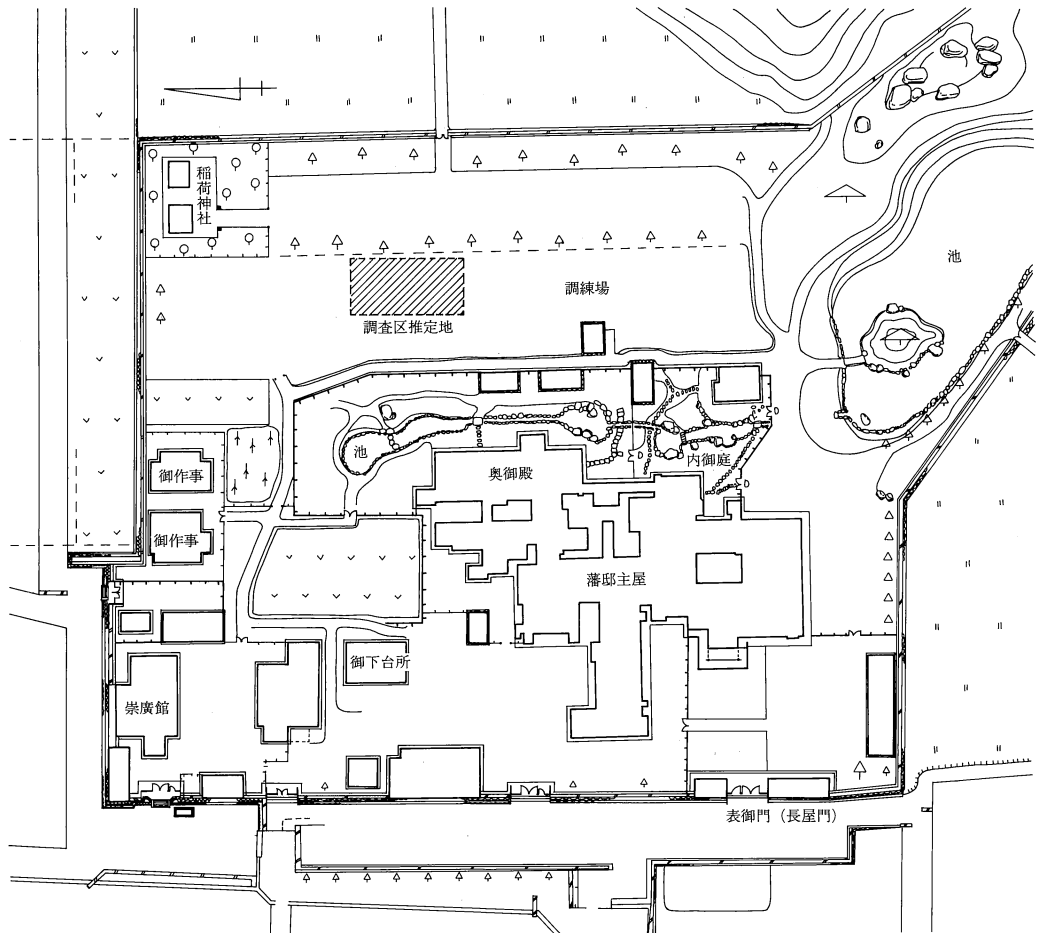
表2. 土器組成表

種 別	須 恵 器										土 師 器		
	杯A	杯B	杯B蓋	杯C	杯蓋	皿A	皿B	皿D	甕	壺	杯A	蓋	甕
百分率%	4.6	25.3	29.9	0.6	3.5	4.6	3.5	1.1	2.9	9.2	5.2	0.6	8.6

## 第4章 結 語

柏原陣屋は、元禄八年（1695）に大和国宇陀（奈良県宇陀郡大宇陀町）より国替えとなった織田信休が正徳四年（1714）に造営した陣屋で、その後明治四年（1871）まで織田氏十代の藩邸として存続している。現在は、創建当時の長屋門と文政三年（1871）に再建された表御殿が残り、昭和46年に国の史跡に指定されている。

今回調査した場所は、陣屋東側の調練場部分に該当しているため、陣屋に関連する建物等の遺構は検出されなかった。しかし下層より従来知られていなかった奈良時代の溝および礎石跡が確認された。当調査区周辺は、明治35年に創立された柏原高等小学校女子補修科のあった場



第23図 柏原陣屋内調査区推定位置図（柏原町歴史民俗資料館提供）

所で、この関連施設と思われる明治から昭和にかけての建物跡および戦時中の開墾によって奈良時代の遺構は、部分的に破壊を受けている。

奈良時代遺構の調査によって判明したことを列記すると以下の通りである。

1. 溝1・2は繋がらず空白地帯をおいて南北方向に対峙する。礎石は両溝の空白地帯に2基並列する。
2. 溝内に堆積した埋土のうち上層は焼土塊・炭化材および土器が多量に混入し、人為的な堆積である。下層は、自然堆積である
3. 対峙して並ぶ2基の礎石跡は、断ち割り調査の結果、下層に柱の痕跡が認められ、掘立柱構造物から礎石構造物に変化している。
4. 3基の土坑は埋土中に炭・焼土・礫・土器を含む。
5. 出土した遺物は、土師器・須恵器・瓦で、大半の土器が奈良時代前半に比定される。

溝1・2と礎石の配置関係から判断すると、溝1・2間の空白地帯は通路、そして、礎石はこの通路部分を限る門跡と考える事は無理がないであろう。ただこの門跡が2基の礎石で構成されるものか、あるいは別の礎石が東側調査区外にも対になる形で存在し、この通路部分を覆う構造なのかは不明である。周辺の地形を概観すると、溝の東側は尾根が迫り地形的に見ても広い空間を得ることはできない。したがって、溝によって限られた空間は溝の西側に求めることが妥当と考える。今回の調査区内では、溝の西側に建物等の遺構は確認できなかったことから判断すると、現在保健所として使用されている建物棟付近にその主体となる構造物の存在が予想できる。

出土した瓦は4点と、土器に比べ極めて少ない。この瓦の出土状況から、瓦葺き建物の存在を推定することは、極めて難しい。ただ門跡と考えられる礎石跡は、掘立柱構造物から礎石構造物に変化していることが判明しているため、いちがいに瓦葺き建物の存在を否定することはできない。

また溝埋土上層は、建物の焼失によって生じる廃土を投棄した層と理解でき、奈良時代遺構の廃絶原因が火災による可能性が強い。

第2章でも述べたように、仮に星角駅を氷上町石生付近に求めたばあい、当陣屋の西側に古代山陰道が通る可能性は高い。この前提に立てば柏原陣屋跡奈良時代の遺構は、古代山陰道沿いに立地することになる。当遺跡が溝で周囲を限り、かつ門をもつ構造である事を考え併せると、当遺跡が寺院址を含めた律令国家体制のなかの公的施設である可能性は指摘しておきたい。

表 3. 出土土器計測値・出土位置一覧

溝 1

No.	種別	器種	口径	器高	径高指数	出土層位
2	須恵器	杯蓋	9.6	3.2+	×	3層
3	須恵器	杯B蓋	(13.1)	2.4	×	廃棄土
4	須恵器	杯B蓋	13.9	2.4	×	廃棄土
8	須恵器	杯B蓋	(17.4)	1.2+	×	廃棄土
9	須恵器	杯B蓋	(16.2)	2.8	×	廃棄土
15	須恵器	杯B	(10.1)	5.2	51	廃棄土
18	須恵器	杯B	(13.3)	4.1	31	廃棄土
20	須恵器	杯B	(12.9)	4.1	32	廃棄土
25	須恵器	杯B	(15.8)	7.6	48	廃棄土
26	須恵器	杯B	17.6	3.9	22	廃棄土
29	須恵器	皿A	15.0	2.4	16	廃棄土
31	須恵器	皿D	(15.8)	3.4	22	廃棄土
39	土師器	甕	(23.6)	5.9+	×	廃棄土

溝 2

No.	種別	器種	口径	器高	径高指数	出土層位
1	須恵器	杯	—	—	—	廃棄土
5	須恵器	杯B蓋	15.0	2.8	×	廃棄土
6	須恵器	杯B蓋	15.1	2.1	×	廃棄土
7	須恵器	杯B蓋	(16.2)	1.5+	×	廃棄土
10	須恵器	杯B蓋	(16.0)	2.5+	×	廃棄土
12	須恵器	杯B蓋	(18.2)	2.9+	×	廃棄土
13	須恵器	杯B蓋	(21.5)	4.1+	×	廃棄土
19	須恵器	杯B	(12.8)	3.9	30	廃棄土
27	須恵器	杯B	(21.3)	6.4	30	廃棄土
28	須恵器	杯C	16.9	2.7+	—	廃棄土
30	須恵器	皿A	14.1	2.4	17	廃棄土
32	須恵器	皿B	(33.4)	6.2	19	7層
35	須恵器	壺	—	11.2+	×	廃棄土
36	須恵器	壺E?	—	5.4	×	廃棄土
37	須恵器	甕	—	1.5+	×	廃棄土
38	須恵器	甕	—	7.0+	×	廃棄土
40	土師器	甕	(24.1)	4.4+	×	廃棄土
41	土師器	甕	(22.6)	10.2+	×	廃棄土
42	土師器	甕	(26.0)	8.7+	×	廃棄土

土坑 1

No.	種別	器種	口径	器高	径高指数	出土層位
14	須恵器	杯蓋	—	2.1+	×	1層
17	須恵器	杯B	(12.9)	4.0	31	2層
21	須恵器	杯B	—	2.2+	—	2層
22	須恵器	杯B	—	1.8+	—	2層
23	須恵器	杯B	(14.1)	3.7	26	2層
33	須恵器	壺	—	4.8+	×	4層

土坑 2

No.	種別	器種	口径	器高	径高指数	出土層位
34	須恵器	壺	—	4.0+	×	焼土層

土坑 3

No.	種別	器種	口径	器高	径高指数	出土層位
16	須恵器	杯B	(11.5)	4.3	38	2層

その他

No.	種別	器種	口径	器高	径高指数	出土層位
11	須恵器	杯B蓋	(18.6)	3.0+	×	溝1付近
24	須恵器	杯B	14.5	4.6	32	不明

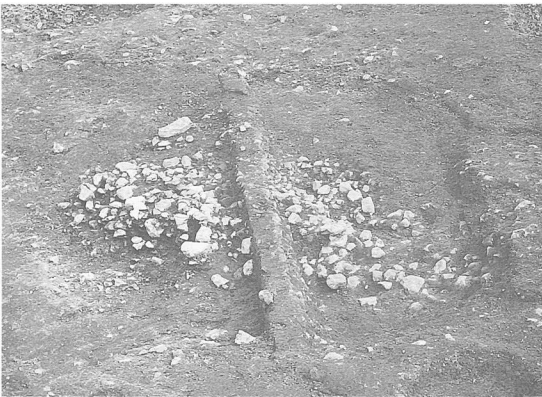
※計測値に ( ) を付した数値は、復元値である。器高値に+を付した数値は、残存高を示す。



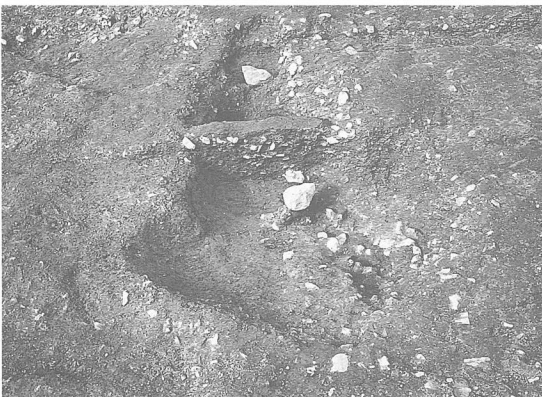
調査地周辺の空中写真



1) 調査区全景 (南から)



2)



3)



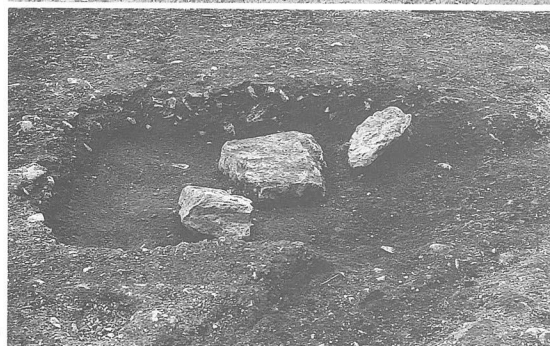
4)

2) 土坑 1 (西から) 3) 土坑 2 (北から) 4) 礎石、溝 1・2 (南から)





1)



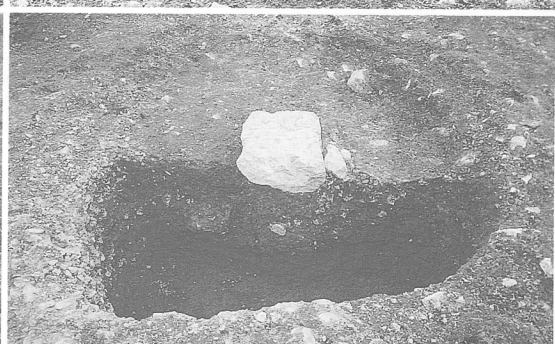
2)



5)



3)



6)



4)



7)

1) 礎石1・2と溝1・2 (西から) 2~4) 礎石1 5~7) 礎石2



1)

1) 溝1 全景 (南から)



2)

2) 土層断面 (南から)



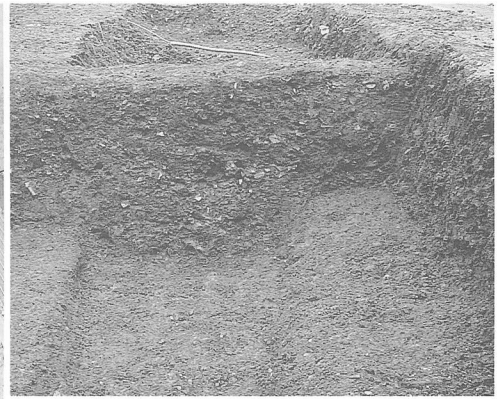
3)

3) 溝内土器出土状況 (北から)



4)

4) 溝2 全景 (北から)



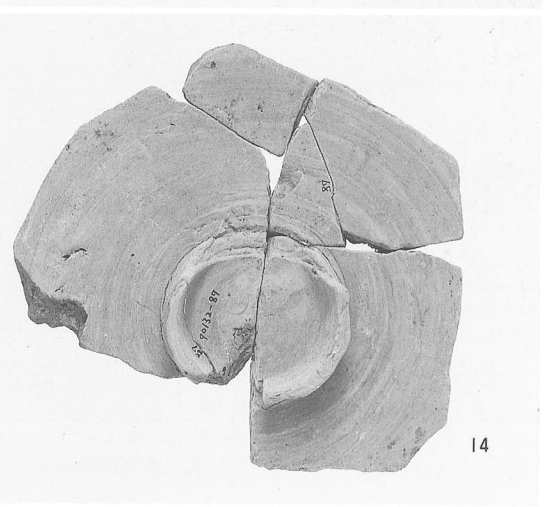
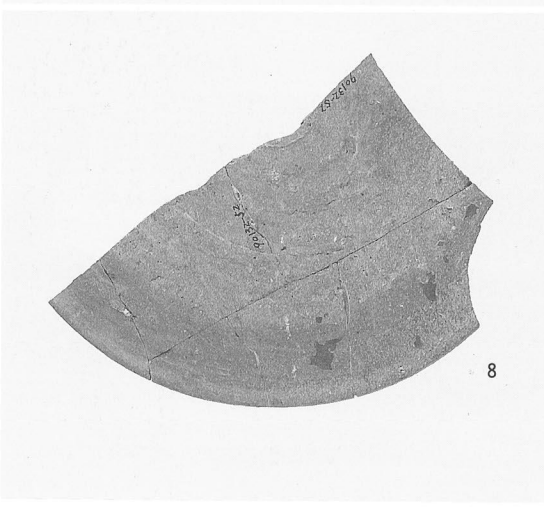
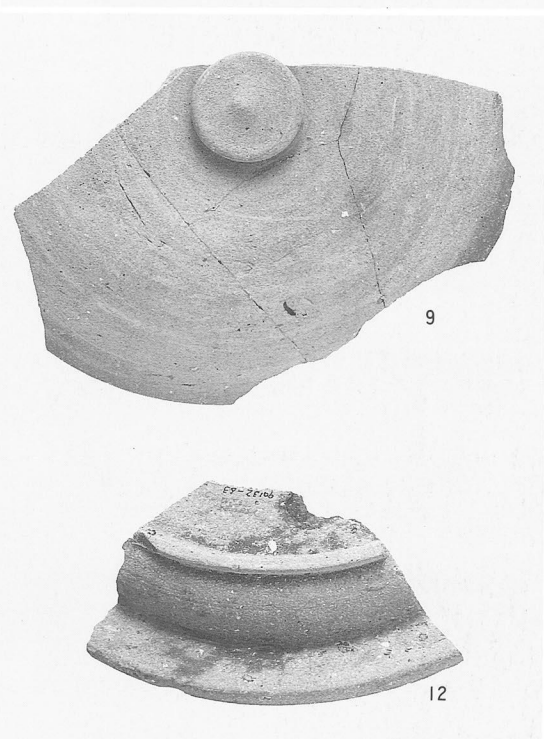
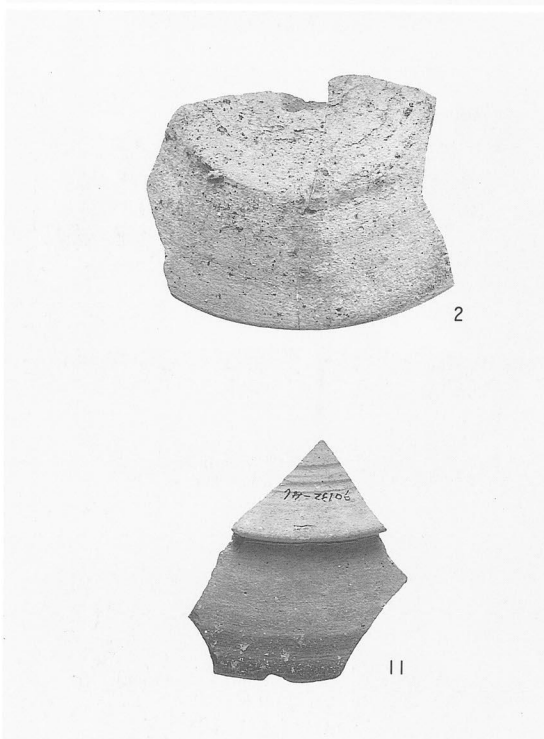
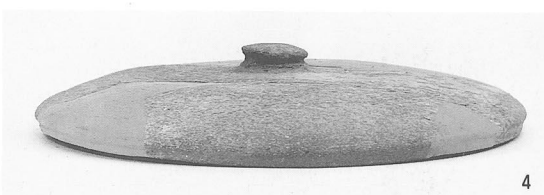
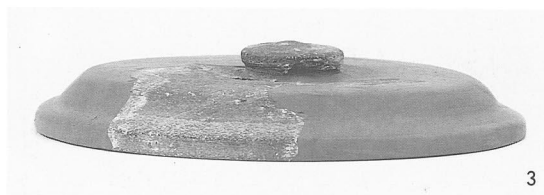
5)

5) 土層断面 (南から)



6)

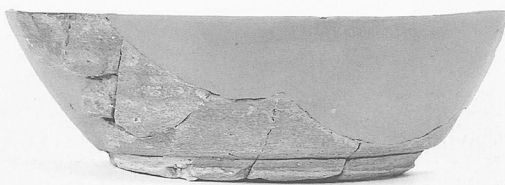
6) 溝内土器出土状況 (北から)



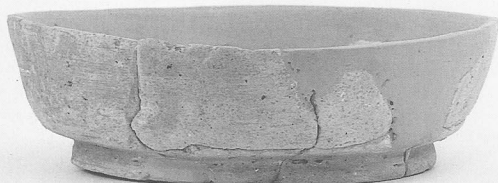
出土須恵器(1)



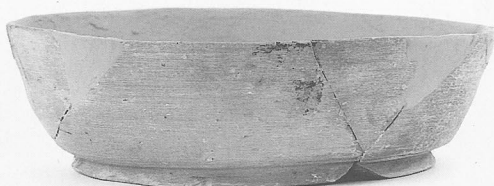
15



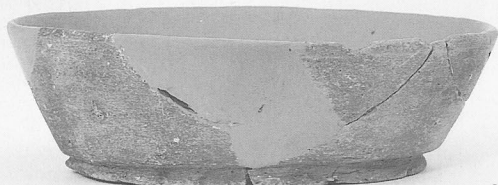
16



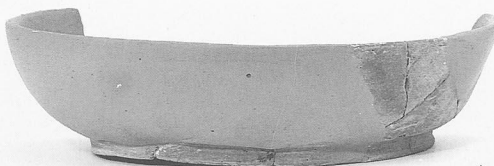
18



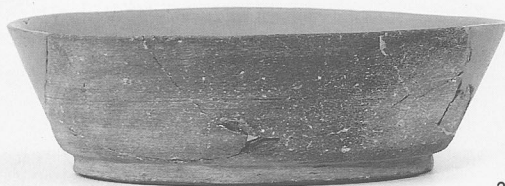
19



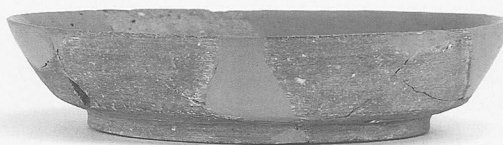
20



23



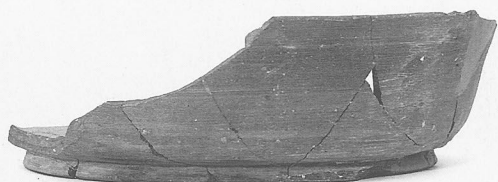
24



25



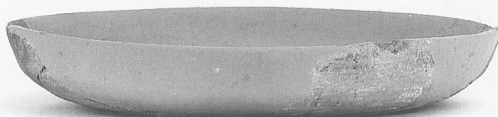
26



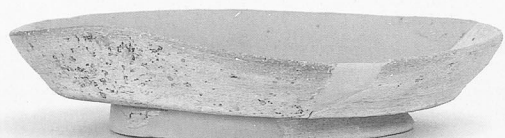
27



29



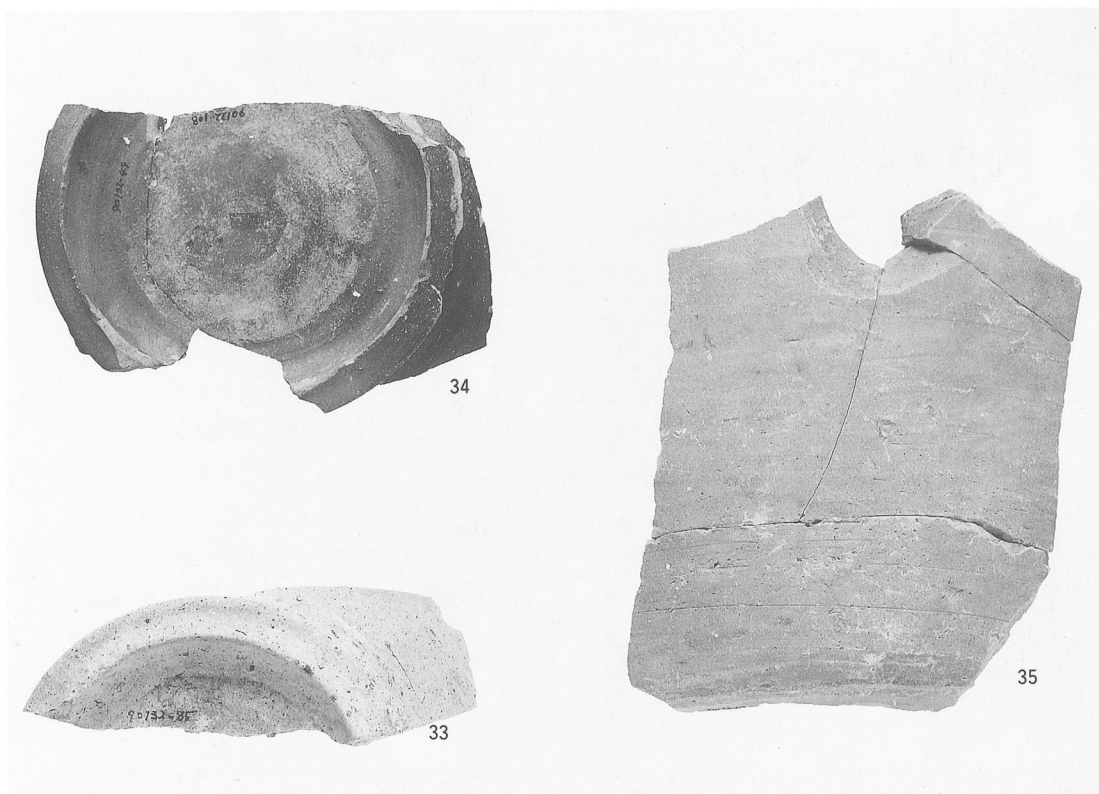
30



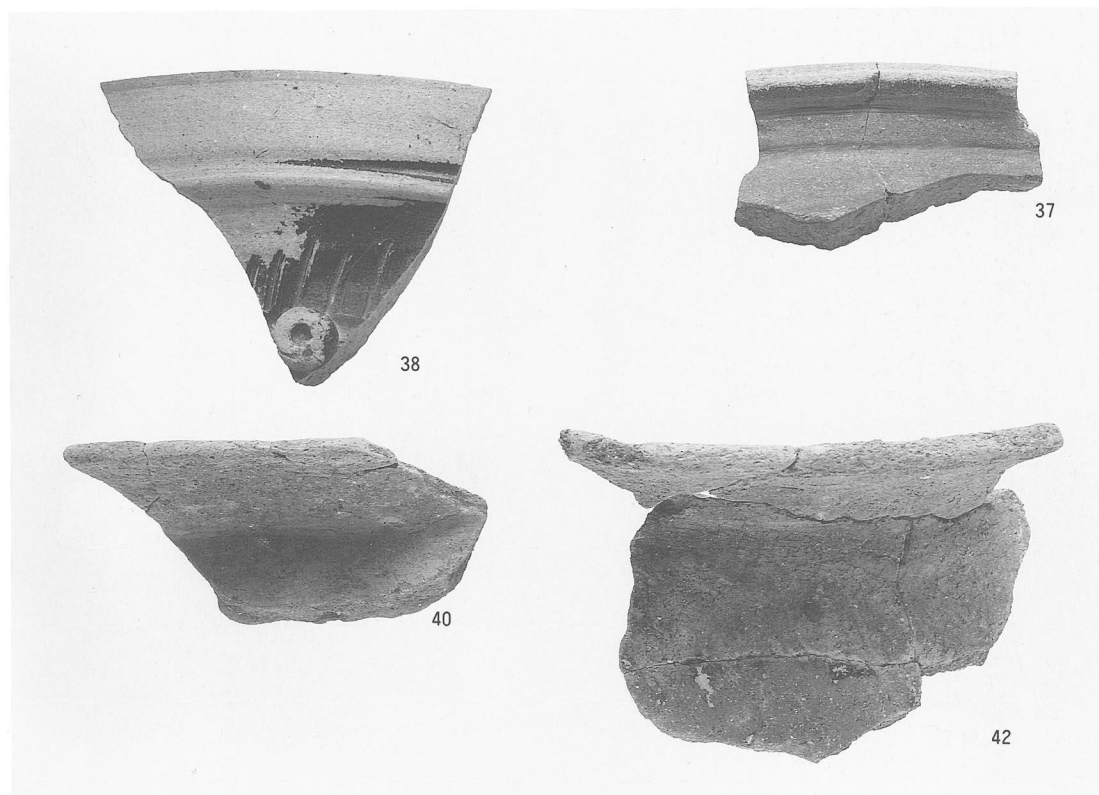
31



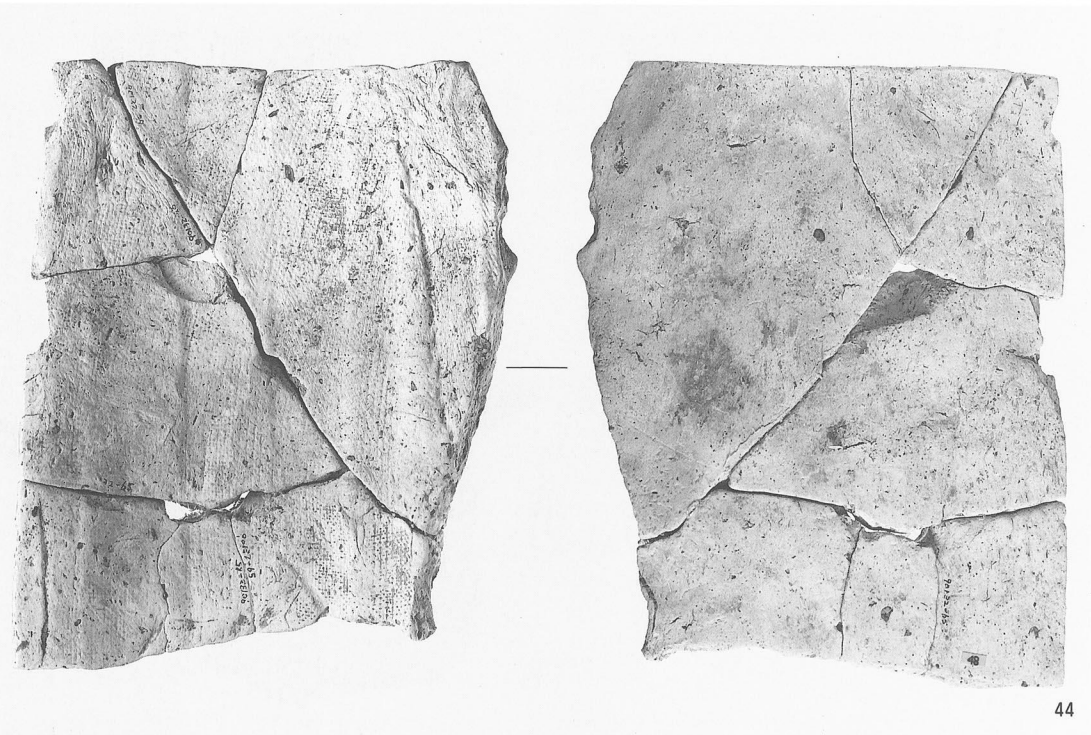
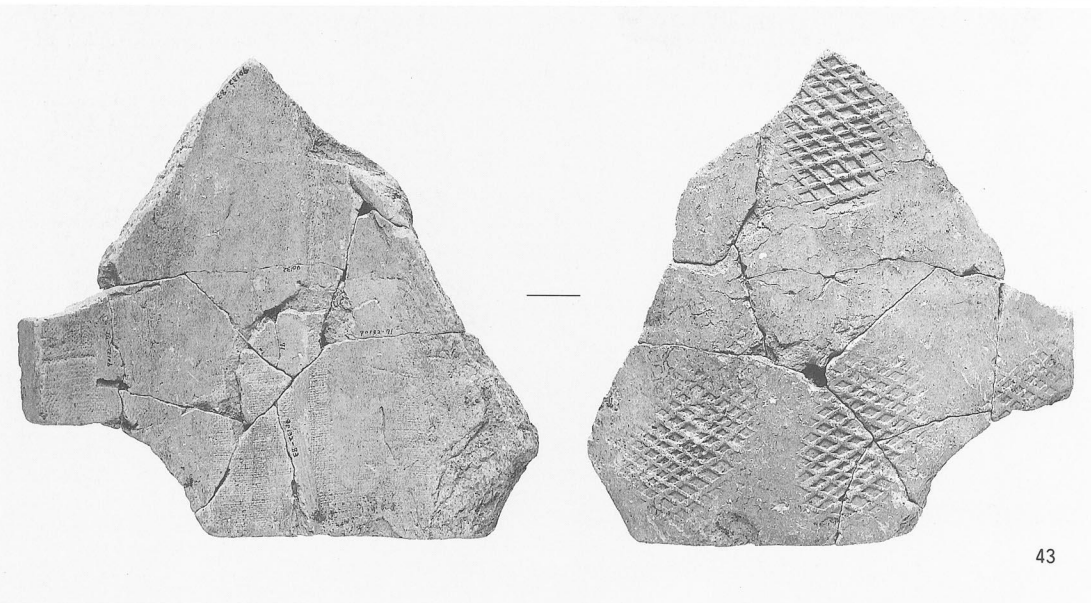
32



1) 出土須恵器(3)



2) 出土須恵器・土師器



---

兵庫県文化財調査報告書 第118冊

柏原陣屋跡(奈良時代遺構の調査)

平成5年1月発行

発行 兵庫県教育委員会

〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10-1  
TEL 078-341-7711

編集 兵庫県教育委員会

埋蔵文化財調査事務所

〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5  
TEL 078-531-7011

印刷 梶原出版印刷合資会社

〒657 神戸市灘区城ノ内通1丁目4番13号  
TEL 078-871-4731

---